「人を区別すること」の比較史研究
—大学教育と研究の融合に向けて—

A Comparative Study on “Aliens” in Premodern England and China
—Towards the Integration of Education and Academic Research—

上野 未央[1]，佐藤 実[2]
Mio Ueno[1], Sato Minoru[2]

[1]比較文化学部比較文化学科（ヨーロッパ文化コース），[2]比較文化学部比較文化学科（アジア文化コース）

キーワード：比較史，区別，差別，大学教育
Key words：Comparative History, Differentiation, Discrimination, University Education

1．研究目的

現在,国内外で人文学の研究と教育の融合についての議論が活発化しており,学士課程における研究と教育の有機的な結びつきを目指す動きも見られる.

人文学の重要な役割は，自らの属する社会の「価値」が絶対的なものでないことを知り，現代社会を批判的に観察する力を育むことであろう．このことは研究代表者と共同研究者が所属する大妻女子大学比較文化学部においても意識されているが，それでもなお，研究が教育と有機的に結びついているとは言いがたい．同様の状況は，広く社会や文化を学ぶことを謳う他大学の学部学科でも見られるのではないか.

その背景には二つの問題があるように思われる．第一に，人文学分野の研究が専門化・細分化され，異なる分野の研究者同士の対話が難しくなっていることがある．第二に，研究が極度に専門化した結果，研究者が，自らの研究と現在の社会や文化の諸問題との関連性を意識しなくなってきていることが指摘されている（将基面貴巳「人文学としての日本研究をめぐる断想」『日本研究』55 巻，2017 年，pp. 63-72）.

これらの問題を解決するために，本研究では歴史学と思想史という異なる分野で研究してきた代表者（上野未央）と共同研究者（佐藤実）が「人を区別すること」という共通テーマについて研究を行い，その成果を教育に結びつけることを目指す.

本研究においては,領域横断的な研究が可能なテーマとして「人を区別すること」を取り上げ，イギリス中世史と中国思想史という異なる分野から比較史的・文化史的研究を行う．その研究成果を取り入れた授業を実践することが，本研究の目的である.

個別の研究テーマとして，代表者の上野は「中世のロンドンで，人はどのようにして人を区別したのか」という問いを設定する．ある時には「外国人」を共同体から排除し，また別の時には包摂した，ロンドンの人々の「人を区別する」行為を，年代記を史料として見ていく.

共同研究者の佐藤は，明代に刊刻された人相術マニュアル『神相全編』を中心に，人の容貌から性格や吉凶を判断する人相術が，一方で当人の心の有り様を考慮にいれるべきであるとする言説を中心に研究を行ってきた．本研究では『三才図会』をはじめとする百科事典における人物表象，さらには中華の周縁に住まう夷狄の表象も視座にいれて他者イメージを検討する.

上記のテーマ設定は，以下の点を重視しておこなったものである．第一に，「人を区別すること」は現代の様々な差別の問題につながる営みであり，授業を通して学生たちが現代社会について考え直す契機となることが期待される．第二に，前近代の中国とイギリスという「現在から遠く離れた世界」を取り上げることにも重要な意味があると考える．対象とする時代と場所が，現代の日本から遠く離れていればいるほど，自らの価値観を見直す必要に迫られるためである．前近代の中国とイギリスを取り上げること

で，学生たちは，自分の価値観が絶対ではないことに気づくのではないか．そして，全く異なる世界に生きた人々のなかに，何であれ自分と共通するものを見つけようとすることになる．それは異文化理解の出発点となる．またそれは，代表者と共同研究者にとって，自らの専門的研究が現代社会にどのような意味を持つのかという問題をあらためて考えることでもある．

２．研究実施内容

2-1 中世ロンドンの年代記にみる「外国人」

中世のロンドンは都市当局，同職ギルド，宗教団体など，多様な共同体が網の目のように存在する都市であった．中世ロンドンに関する研究史を紐解くと，各種共同体の形成の過程やそれらの機能について詳細な研究が行われてきた．次なる課題として，共同体の内部と外部との関係性の解明が必要となった．そのため，共同体の境界を行き来した「外国人」に着目した．

代表者はこれまで，イングランド以外の土地からロンドンに来て滞在・定住した「外国人」に関する研究を行ってきた．これまでの研究において，イングランドではヨーロッパの他地域より早く，中世後期から「イングランドの外から来た人々」，現代でいう外国人が強く意識され始めていたことを確認した．しかし，ある人物が「外国人」とされるかどうかは，時と場合によって異なった．ヨーロッパ大陸出身でもロンドンの同職ギルドに入り市民となった人もいた．ロンドンに商館を持ち交易を行ったハンザ商人がいた一方で，フランドル地方の諸都市から家族で移動してきた職人たちもいた．ロンドンの「外国人」のあり方は多様であった．この状況を図にすると以下のようになる．

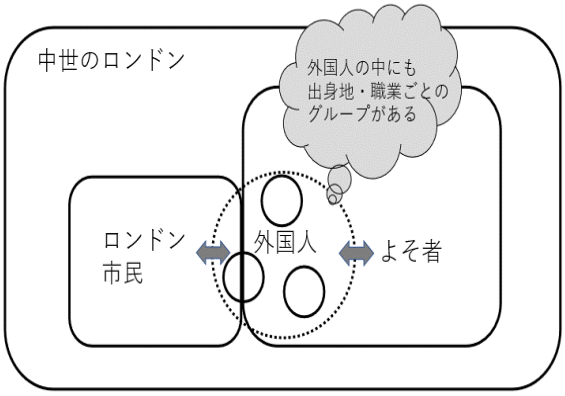

図 1．中世のロンドンにおける「外国人」

本研究では，史料として 15 世紀ロンドンの年代記を利用した．まず年代記の史料としての特徴を，先行研究や刊行史料を利用してまとめていった．

中世ヨーロッパでは，聖職者によって，特定の宗教団体に関わる記録のため，あるいは王の事績を書き留めるために年代記が作られることが多かった．しかし 14 世紀から 16 世紀初頭にかけて，ロンドンでは，都市の記録を集めた年代記が多く書かれた．年代記を収めた写本群の中には，ロンドンの市民（都市エリート層）によって書写されたと推察されるものが複数ある．また年代記写本の多くが市民たちによって保有されたと考えられている．

以上のようにロンドンの年代記の史料的特徴を整理したうえで，年代記において「外国人」が描かれた場面を抽出した．特に，1905 年に C. L. Kingsford によって公刊された 3 年代記の記述を確認し[*Chronicles of London*, ed. Charles Lethbridge Kingsford (Oxford, 1905)]，「外国人」がどのような場合で記録されたのかをみた．

その結果，大きく分けて 3 種類の文脈で「外国人」について書かれていたことが明らかになった．第一に，イングランド内の反乱に乗じて「外国人」がイングランド人の暴徒から襲撃を受けた事件がいくつか記録されている．

第二に，議会で「外国人」に特別税を課すことが決まったことや，ロンドン市内での「外国人」による商取引仲介の規制についての取り決めが記録された．年代記の作成に関わったロンドン市民たちは，商取引の相手あるいはライバルとして，「外国人」を意識していたと考えられる．

一方で，王の入市式の際に市民たちだけでなく「外国人」たちも行列を作って王を迎えに赴いたという記述もあった．たとえば 1436 年のヘンリ 6 世の入市式では，ヨーロッパ大陸の各都市からやってきてロンドンに暮らす商人たちも着飾って王を出迎えた様子が描かれた．そこには国際都市ロンドンのイメージが良きものとして描き出されているといえるだろう．

2-2 前近代中国における外国人イメージ―人相術と百科事典からみる

自身の文化を世界の中心とするエスノセントリズムをそのまま自身の呼称とする中国の前近代における，中華の周辺にいた人々をどう認識していたのかという問題設定のもと，容貌に焦点をあて

た 7 世紀頃に刊刻された『五行大義』に引用された人相術マニュアル（相書という）の記事と，17 世紀に刊刻された絵入りの百科事典（『三才図会』）における夷狄，外国人表象を検討した．

『五行大義』に引用された相書において中華に住まう人々と夷狄を区別する代表的な要素は，予想に反して人相ではなく，『論語』以来重視されてきた「衣冠」が正しいか否かである．それが意味するのは見かけの服装にとどまらず，文化的であるか否かということであった．とりわけ「冠」はその象徴であり，この「冠」を支える髪型（冠は結った髪にかんざしによって固定される）も注視されていた．

一方，『三才図会』では，自国の歴史上の人物については身体的特徴を記述するが，外国の人物については容貌の記述はすくない．それは図示されているからかもしれないが，ただし奇異な容貌については特筆している．その奇異な容貌についてはイエズス会士たちが来華して新しい情報が入ってきていたにもかかわらず，あいかわらず『山海経』をはじめとする古い異域イメージを引きずったものであった．そして『三才図会』の著者はどちらかというと生活習慣や名産品などに興味関心があったように見受けられる．

2-3 授業実践

上記の研究結果を持ち寄り，上野が担当する比較文化学部の授業「比較社会論」（比較文化学部，学部共通科目，2～4 年生対象，オンデマンド授業）において共同で授業を行った．この授業では中世ヨーロッパの都市社会史を扱った．中世ヨーロッパの歴史を概観するとともに，中世のロンドンについて取り上げて，他の都市と比較史ながら論じていった．その授業の一環として，本研究課題の目的の一つである授業実践を行うこととなった．なお，比較文化学部では学生たちは 2 年次からアジア文化コース，アメリカ文化コース，ヨーロッパ文化コースに分かれて学習するが，この授業は全コースの学生に開かれている．

「比較社会論」において共同授業を行う前に，複数回の打ち合わせを行った，打ち合わせでは，互いの研究内容について意見交換を行うとともに，それらを授業に生かすためにはどのようにしたらよいかを議論した．打ち合わせの結果，それぞれの研究に関する授業を 2 回行い，互いに質疑応答を行う時間もとることとした．「比較社会論」第 12 回，第 13 回，第 14 回の一部が本研究課題に関わるものとなった．オンデマンド教材として，YouTube 動画を配信し，報告レジュメをクラウド上（manaba）で配布した．学生からは毎回の授業後に manaba でコメントを提出してもらった．

第 12 回授業（12 月 13 日）では上野の研究内容に関する講義（特別企画 中世ロンドンの「外国人」）を配信した．冒頭では上野と佐藤から，当該研究課題の趣旨説明を兼ねて「この授業のねらい」を説明した．そのうえで，上野から，ロンドンにおける「外国人」についての講義を行った．年代記という史料に「外国人」がどのように描かれたか，史料のテクストを紹介しながら示した．さらに，授業のまとめの部分では，講義に対して佐藤から上野へ質問を投げかけてもらい，そこから対話へとつなげるというかたちをとった．

第 13 回（12 月 20 日）授業では，まず 13 日の上野の授業に対する学生のコメントをいくつか取り上げ，教員 2 人でコメントから議論を発展させて話し合う動画を作成した．次に佐藤が「前近代中国における外国人」というテーマで講義を行った．実際の史料を挿絵も含めて提示しながら，前近代中国における他者イメージについて解説した．動画の最後の部分では，上野と佐藤がこの授業の内容に関して補足や意見を述べた．

最後に，第 14 回（1 月 13 日）の授業の冒頭において，12 月 20 日の授業に対して学生から寄せられたコメントへの佐藤の返答と，佐藤と上野との質疑応答を配信した．また過去 2 回の授業のまとめを行った．

また，授業で利用した史料の作成意図が異なるため，2 つの講義内容を単純に比較することはできないということを授業では説明した．それぞれの史料から，異なる「他者」像が浮かび上がってくるが，それは地域の違いだけではなく，史料の性質の違いでもあるためである．

一方で，どちらの史料も先行する史料群からの書写であるという共通点がある．前近代に作られた史料の多くが作者不詳である．それは，「誰が書いたのかわからない」ということであるだけではなく，だけではなく，記録した人が，それ以前にあった別の文書群から書き写していったということである．つまり先行するいくつもの史料群の中から，誰かがある時点で選び取って書き留めた行為の結果なのである．この点についても授業で取り上げた．

３．まとめと今後の課題

本共同研究では，それぞれの個別課題に取り組むとともに，それを組み込んだ共同授業を行った．それぞれの個別研究課題については，各自論文を準備中である．

共同で行った授業については，学生たちからおおむね好意的なコメントが寄せられた．特に，今まで教員同士が専門的な内容を話し合う場を見たことがなかったので，興味深く講義を受けることができたというコメントが多くの受講生から出されたことを記しておきたい．特に，所属するコースが異なる教員同士の研究内容を並べて議論する授業はないため，新鮮で面白かったというコメントもあった．授業において教員同士の対話を「見せる」ことにも意味があるのではないだろうか．

また現代社会において重要なテーマである「他者との関わり合い」や外国人差別の問題とも重ねてコメントを書いた学生もいた．自分の問題として考えることにつながった点は，担当者として喜ばしいことであった．ただし，授業でも述べたように，前近代社会の「外国人」と現代の「外国人」とを安易に結びつけてしまうこともまた危険である．授業では「外国人」という言葉の揺らぎや，その複雑さを伝えることも重視した．今後も，前近代社会を取り上げる際には，現代社会とのつながりだけでなく，同じように見える語でも，当時は意味が異なっていたことを伝えることも重視したい．

また，本研究において最も困難だったのは，異なる研究分野の研究内容を共同で授業に取り入れることであった．隣接分野とはいえ，歴史学と思想史は異なる研究分野として発展してきた．打ち合わせの中で，互いの研究内容をすり合わせることは難しいことが分かった．この点に関しては，互いの研究内容に対して率直に質問して語りあうことを心掛けた．また教員同士の意見交換の様子を学生にも見せることとした．それによって「学生も共に考える」授業を展開することができたのではないかと考えている．

この共同研究を通して，異なる分野から一つのテーマで語るということの難しさを実感した．それでもなお，教員同士が対話を繰り返しながら，他分野との交流を試み，教育に生かしていくことが人文学の研究と教育の融合にとって重要であると考える．大妻女子大学比較文化学部には，異なる分野の専門家が集まっている．今後も，異なる分野の教員同士で専門的な研究内容について共に議論して学生と一緒に考えるような授業を企画していきたい．

４．この助成による発表論文等

①雑誌論文

準備中

②学会発表

[1]上野未央「中世後期ロンドンを知るための史料について—年代記を中心に」（前近代のメディアとコミュニケーション研究会）2020 年 3 月 20 日　オンライン開催